

オープン・エスノグラフィ GakuNin RDMと連携したデータ管理ソフトウェアによる質的研究の コラボレーションとオープンデータ化の研究

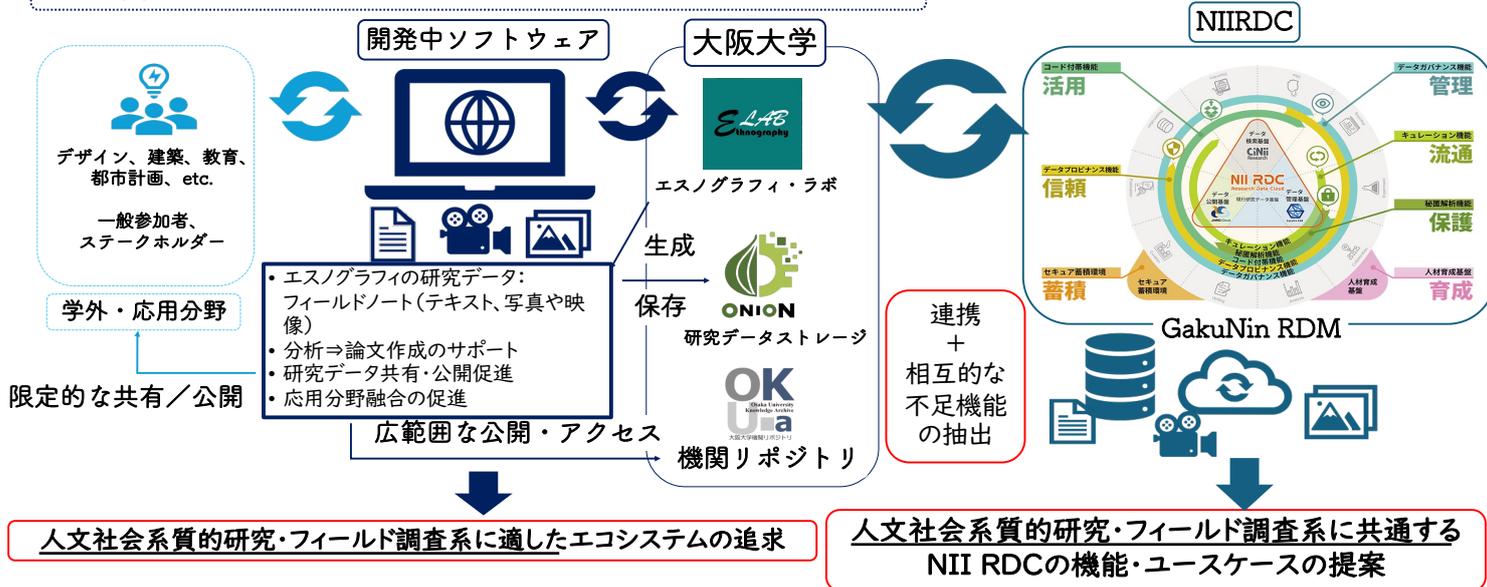
大阪大学 Bridge To 京都工芸繊維大学

神崎 隼人(大阪大学附属図書館)、甲斐 尚人(大阪大学D3センター)
森田 敦郎、サン=ピエール、E.、韓 智仁、原山 都和丹(大阪大学人間科学研究科)
杉田 真理子(Bridge To)、水内 智英(京都工芸繊維大学未来デザイン・工学機構)

目的と概要 従来のエスノグラフィでは、調査協力者のプライバシー秘匿等の調査倫理や、また技術的な課題も背景にあり、研究上の慣習として他人と研究データを共有してこなかった。だが近年、多様なステークホルダーとの協働が求められ、研究データのオープン化は喫緊の課題である。本プロジェクトでは開発中のデータ共有ソフトウェアを研究データ基盤と連携させ、オープン化に即した研究ライフサイクルを開発し、分野共通のNII RDCの機能やユースケースを提案する。

「オープン・エスノグラフィ」のエコシステム連携

2022年度～ オープン・エスノグラフィのパイロットプロジェクト



エスノグラフィ?

◎オープン化への分野特有の課題

「民族誌」とも訳される英語。研究者が研究対象者の人々と生活や活動をともにしながらその社会的な世界(意味、行為、社会構造など)を内側から理解する、社会科学の主要な質的研究方法である。近年ではデザインやアート、建築、さらにビジネス等の応用的な異分野・実践でもイノベーションのために広く注目されている。

エスノグラフィの主要な研究データとはフィールドノートであり、近年、デザインや建築、ビジネスなど応用的な異分野での一般研究対象者の生活や活動の詳細な記録である。フィールドノートの流れとして、エスノグラフィを担当する研究者が研究対象者は研究者と調査協力者の密接な交流から作成されるため、研究と協働して研究を実施するようになっている。こうした事例では、データは多くの秘匿情報を含む。近年では匿名化処理が行われフィールドノートが研究対象者の合意のもとに作成されるため、るものの、研究者は秘匿情報を含む研究データを厳密に管理し従来の研究データにおける秘匿情報をめぐる倫理的な問題を事なければならず、それゆえ研究データの共有・公開・利活用は倫前に回避できる。また、それを前提として研究対象者と研究データを共有する事例もみられるようになってきた。とはいえ、この分野におけるデータ活用は重要視されつつも進んでいない。

💡特化したデータ管理システム開発

大阪大学人間科学研究科、エスノグラフィ・ラボでは、フィールドノートや研究データの共有と一般公開に向けた実験を2022年度より実施し、エスノグラフィのデータ管理専用ソフトウェアを合同会社テンマドと共同開発している。ソフトウェアはフィールドノートのエントリー(おおよそ1日分の調査記録)を基本単位としたデータベースである。各エントリーはテキストデータおよび外部ストレージに保存した画像・動画データへのリンクからなり、またそこで研究データには必要なメタデータも付与され、共同編集・共有ができる。さらに論文作成を支援する機能も備え、フィールドノートから論文成果までの過程(エスノグラフィのライフサイクル)を追跡できる。このデータ管理システムは、GitHubのようなオープンソフトウェア開発におけるバージョン管理の方法(プロセス・ドキュメンテーション)を参考にしており、分析メモ作成やドラフト作成など各段階でデータ作成者が任意のバージョンを保存できる(≠自動バックアップシステム)。第三者は、論文内の分析や主張とデータの関係性、その過程での分析手続きを確認できるようになる。質的データ分析は標準化されているものの、統計のように機械的に複製できないため、単純なデータセットの共有と分析方法の提示だけでは分析過程を復元できない。このソフトウェアはプロセスドキュメンテーションの手法を転用することで、エスノグラフィに特有の研究データ共有・公開・利活用の課題解決を図る。

各データ基盤との連携、フィードバック

本提案では、データ管理ソフトウェアを本学の研究データストレージ ONIONそしてGakuNin RDMと連携・活用し、持続的かつ安全に学内外の研究者やステークホルダーとデータ共有可能な新しいエスノグラフィのエコシステム連携を開発する。ONIONはGakuNin RDMの拡張ストレージとしてS3互換APIによって既に連結済みであり、ONIONにデータを集約させられればGakuNin RDM上でのデータ管理ができる。また、データ共有と倫理的な問題・プライバシーの保護を両立させるための、エスノグラフィに特化した研究データのオープン・アンド・クローズ戦略を開発する。システム上では学内外の関係者とデータの限定的な共有・利活用・公開を展開する。その一方、本学機関リポジトリ OUKA上で本プロジェクト用のコレクションなど多様な方法で公開し、異分野の研究者にも広く容易にアウトリーチできる。本提案ではデータ管理ソフトウェアの活用によりエスノグラフィのエコシステム連携を追求するだけでなく、エスノグラフィ研究者がGakuNin RDMやNII RDCに求める機能や考え方を抽出し、社会科学系の質的研究やフィールド調査系に広く共通するNII RDCの機能やユースケースを提案する。エスノグラフィのライフサイクルにおいては、データの収集→分析→調査方針の改訂が繰り返される。そのためデータ管理方針の変更は調査の実践そのものの再構築を必要とする。そこで、本プロジェクトでは、データを対象者や幅広いステークホルダーと共有することが、倫理上の配慮のみならず、エスノグラフィの研究データライフサイクル全体に及ぼす影響を検討する。

パイロットプロジェクト 京都市での協働

本提案に際して、本学エスノグラフィ・ラボは上記の問題を検討するために、他大学・異分野の研究者、一般参加者やステークホルダーとデータ共有するパイロットプロジェクトを実施する。具体的には、京都市での地域産木材を用いて古民家を断熱改修しパブリックスペースを作る取組みをパイロットプロジェクトに活用する。このプロジェクトでは、デザイン、材料調達、施工の過程をエスノグラフィの手法で記録・分析し、気候変動対策のための断熱改修が地域産材の新たな需要を生み出す可能性を検討する。ソフトウェアを用いることで、幅広いステークホルダーとのデータ共有とそのための倫理的な措置が、エスノグラフィ研究データライフサイクル、ソフトウェアのデザインにどのような影響を与えるのかを検討することが可能になる。